

## Special Essay

## 大学における教育で重要な3大要因

看護学科長 自見 厚郎

英国の思想家 J. S. ミルはセント・アンドルーズ大学名誉学長就任演説の中で、19世紀中葉の英国における大学教育の有り様として、大学では一般教養教育を実施し、職業教育は専門学校アカデミーでなすべきであると述べている。140年後の今日では、悠長なことは言うておられない。わが国の医師・看護師養成教育は、専門医療職者を養成するという確固たる目標があり、6年間または4年間で一般教養教育・専門教育を実施している。卒業間近に国家試験があり、教育の成果が総括されることになる。しかし、国家試験という枷がないので、大学院教育では、学生の総合的な知力の向上を企図しなければなるまい。知識を増やし多数の経験を積むこと、知識や経験を統合整理し、関連付けて、さらに明快に表現・発信することの3つの項目を、学生に課さなければならない。ところが、看護系の院生のみかもしれないが、3項目を課そうとしても、学部教育で知識の詰め込みで終始した学生にはハードルが聊か高いようである。学科学生は言わずもがなである。知的筋肉は読書量に裏づけされる。足が地に着かない軽佻浮薄、読書不足による地頭の弱さ、未経験による役不足が目覆うばかりの惨めな結果を招来することを、ここ数年の政治の世界が見事な迄に明らかにした。特に、知識、技術、思いやりの三位一体が要求される分野では、知識や技術の急速な進歩から取り残される心配がある。基礎固めをせずに見切り発車すると手痛い目にあうことを、某国の高速鉄道事故が如実に示してくれたのはほんの1年前のことである。

院生の教育は特定分野の専門研究者および高度の技量を有する専門実践医療者を目指している。本学大学院の看護系に限定すると修士課程で専門看護師 CNS も養成している。質の高い看護を提供するための知識や技術を身につけたいという意欲のある看護師が集い、高度で実践的な教育が行われている。教員側も学生に伝えようと努力しているが、学部学生や認定看護師の教育と並行するのでいきおいマンパワーの不足に伴う負担増となっている。コンテンツの充実が教員数に依存するところ大であるから、惜しむと禍根を残しかねない。

大学教育のハコモノ、コンテンツとヒトがバランスのよい三位一体であれば、落ち着いて、精選された授業（講義や実習）は静かな環境、深い思索に裏付けられた理解が可能である。異議を唱えるわけではないが、各大学は自己点検自己評価やFDの嵐に翻弄されるか

のようである。教育の質の評価を数値化することなど不可能ではないか、工業製品と工場のように学生と教員を含む教育機関を捉えることが果たして正しいのか、と常々疑問を抱いている。幕末の英傑志士が学んだ吉田松陰の松下村塾、緒方洪庵の適塾、広瀬淡窓の咸宜園などの塾が成功を収めた理由は何であろう。親鳥と雛鳥がタイミングよく卵殻を割ることをさす啐啄同機である。

本学は地方にあっても、独自の時間リズムで卒業生をだし、それなりの一定レベルの評価を受けている。大学としての教育力は総合的に評価されるはずで、決して卒業後の国家試験合格者数をパラメータにしてはならないのである。教育の質を問題にすれば、確かに目先の問題としては合格者ではあろうが、その大学で学んだ卒業生がどのような医師として地域医療に尽くしたか、研究者として業績を生み続けたか、またどれだけわかりやすい授業をしたか、まとめると医師、研究者、教育者としての卒後は本人のやる気と学習に懸かっている。本人のやる気と環境が適合すると学生は確実に化ける。棺を覆うて定まる人の評価と同様、教育の評価も時間がかかり、同様であるからあせらず確実に歩を進めることが重要である。

再度主張しよう、教育の要諦は啐啄同機であるから、教員の務めは弛むことなく、知識の精選と集積に精励することに尽きる、と。

